

## 朗読文

ある日のことでございます。御釈迦様は極楽の蓮池の淵を、一人でぶらぶらお歩  
きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のように  
真っ白で、その真ん中にある金色の髓からは、何ともいえないいい匂いが、絶え間  
なくあたりへ溢れております。極楽はちようど朝なのでございませう。

やがて御釈迦様はその池の淵におたたずみになって、水の面を覆っている蓮の葉  
の間から、ふと下の様子をご覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちようど地  
獄の底に当っておりますから、水晶のような水を透き通して、三途の川や針の山の  
景色が、ちようど覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底にかんだたという男が一人、他の罪人と一緒にうごめいてい  
る姿がお目に止まりました。このかんだたという男は、人を殺したり家に火をつけ  
たり、色々悪事を働いた大泥棒でございますが、それでもたった一つ、善い事をい  
たした覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通ります  
と、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこでかんだたは早  
速足をあげて、踏み殺そうといたしました。が、「いやいや、これも小さいながら命  
のあるものに違いない。その命をむやみにとるといふ事は、いくら何でも可哀そう  
だ」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからで  
ございます。

御釈迦様は地獄の様子をご覧になりながら、このかんだたには蜘蛛を助けたこと  
があるのを思い出しました。そうしてそれだけの善い事をした報いには、で  
きるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。幸、そば  
を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀  
色の糸をかけております。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつとお手にお取りになって、  
玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、真っ直ぐそれをお下しなさい  
ました。